

掌篇

# ホミドの歌と踊り

畑三四郎



ゴリラのオスは、メスより体格が二倍大きい。

人間の男女の体格差は一・二対一だし、テナガザルのそれは一対一だ。

ゴリラは一夫多妻で、テナガザルは一夫一妻……。

ようするに、オスがでかいほど、一夫多妻になり、その差が少ないと一夫一妻になるらしい。自然の摂理だ。

サオリは身長一九五センチで卓也が一五〇センチだった。体重では倍近い。多夫一妻を暗示している。

彼女のリングネームはビート・サオリ、母親はアーリア人種らしい。青い目の金髪で女子プロレスラー兼モデルとくれば、所得も交友関係も、文学の世界に閉じこもっている卓也をはるかに上回る。リスクが高い結婚にはちががなく、卓也は男の薬指にぴったりの婚約指輪を何度もながめてうつむくしかなかった。

その夜、サオリは体重百キロの宿敵豪姫をバックドロップでマットに沈めた。エアコンで汗がひいてゆき、アドレナリンも徐々に消えてゆく。代わりに深い呼吸と静かな心が戻ってくる。これからデートだからと言って、スタッフを先に帰した。控え室に一人残り、贈られた花束に混じる懐かしい沈丁花の匂いに刺激されて、卓也を思い浮かべた。

更衣室の鏡にギリシャ彫刻のような裸体を写し、その横に卓也の姿を想像する。ちびで気難しい卓也、サオリにだけときどき見せる笑顔、ちょこまか動いて、サオリのわき腹をくすぐり、大きさをからかいながら胸をちよつとついたりして鼻の下を長くする卓也、バカみただけで、鏡に映る自分の目元がゆるんでいるのに気づいてしまった。

頭は良いけど、目が点になるだけでさっぱりわからない文章をいつも眉をひそめて書いている。理屈がご飯より好き。サオリがチキンを三羽食べても、卓也は手羽先一つ。サオリがボール一杯のサラダを食べると、卓也はおしんこをひっそりつまむ。

子供のころから大女とからかわれて育ったサオリだった。母の顔は知らないけれど、豊職人だった小柄な父に厳しく育てられた。

《大女のどこが悪い！ アフリカに行けば身長二メートルの女がうようよだ》

と、父は畳を縫う手を止め、厳しいまなざしで叱った。

《こんど大女と言われたら……》

そう言って父は、空手の奥義、抜き手で畳を貫いた。サオリは涙目でうなずく。力にくわえて技に目覚めた瞬間だった。その父に仕込まれた空手が、今、サオリを支えていた。

待ち合わせのアフリカ料理専門店で、サオリを切なくさせているのは、この出会いの場所で別れを告げる決心をしていたからだった。

卓也とこのままではいけないとずっと悩んでいた。卓也が五年たってもプロポーズしてくれない理由がおぼろげにわかる。小男と大女の組み合わせが、はずかしいだろうから、男のプライドがきつと、ゆるさないから……、サオリは泣きそうになるのをこらえて、胸の痛みを隠した。

打楽器のビートが響いて、アフリカ大陸の客たちが軽くリズムにゆれている。

卓也の好物、ポークの黒煮込みが四人前、山盛りの向うに煮え切らない物憂げな卓也がいる。リズムに溶けていないのは卓也とサオリだけ。

やっぱり、だめかも……私みたいな大女と一生連れ添うなんて、卓也がかわいそうとサオリは目を伏せた。

強烈な香辛料がサオリの目にしみて、サオリはヤケ食いをはじめた。インドカレーよりしびれる辛さがサオリの鼻の頭に汗をふきださせても、かまわず豚の黒煮を口につめこむ。辛さも気にならなくなるくらい、味なんか麻痺してしまうくらいに。

《私達、別れましょう！》そうサオリは思い切って叫んだ。けれども、口に詰め込まれた真っ黒な煮込み豚のおかげで、もがもがと息がもれるだけだった。

「なに？ サオリ、なんていったの。良くかんで食べないと体に毒だよ」

卓也は、ほらっ、といてナプキンでサオリの口を拭いてくれる、鼻の頭の汗もついでに。

そんな光景が子供の頃にあったような気がする。いじめられて帰ってきたサオリを小さな父がいつも……。

サオリははっとして宙をにらんだ。父はもういない。その上、卓也を失ったら？ 崖から突き落とされて暗い谷底に落ちてゆく自分が垣間見えた。

《でも、今の私の気持ちを言葉で伝えられるの？》

サオリには自信がなかった。国語が苦手な私に、頭が理屈でできている小説家に何が言えるの！ 私にできること、この気持ちを卓也に伝えるすべ！ サオリは宙をにらんだままだ。

《サオリ、大きいことを生かすんだ！》

途中で倒れた父が逝くまぎわに……。

《そうよ、私にはこの体！》

サオリは卓也を妖しく見つめ、ただ一人上着を脱いだ。

テーブルの狭間で突然サオリは爆発した。他の客たちの好奇の目も、すぐにサオリのビートに魅せられる。

はだけた金髪が、激しく回る体が、サオリの息遣いが卓也の目をなで、耳を突く。飛び散る汗が豚の黒煮に飛び散った。

風が卓也の顔を吹きぬけ、サオリの命の匂いが卓也の腰を浮かせた。

サオリが腰をふり、走り、勢いがリズムになる。蒼い目が卓也を覗く。

あぜんとした卓也は呟いた。

《何を言いたい？ サオリ》

サオリが切ない瞳で答える。

《じゃない！ 言葉じゃない！》

サオリは逃げ、跳ね回り、舞いもどる。ビートが短く、高く、空間に飛び散る。サオリは飛び込み、リズムの中に消え、ダンスになった。

サオリはうなりをあげて卓也のそばを飛んだ。翼をはばたかせ、卓也を風ですくっと立ち上が

らせた。棒になった卓也の周りを、横顔で、後姿で、蒼い目で、跳ねる金髪で、卓也をさわり、卓也をなで、卓也を抱きしめる。本当のサオリを卓也の胸の中に注ぎ込む。

卓也の表情が変わる。訝しげな目が和らぎ、口もとがゆるみ、指先がサオリに向かう。背筋がぴんと伸びた。口をあけて何かを呟く――サオリ――卓也の目の色が潤んだ！

卓也の足が、風音になったサオリに向かう。胸が急に熱くなる。卓也が顔を赤らめ、だが毅然として指輪をサオリにかざす。

サオリははっとして立ち止まり、自分の顔が太陽になるのを感じた。喉の奥から聞いたこともない雷鳴が、叫びの歌が轟いた。　（了）

軒先には相も変わらずアイスクリームボックスが置かれ、奥に続く通路を挟んだ左側には派手な包装紙に包まれた雑多な駄菓子が、昭和そのもののように居並んでいる。手前の床に置かれた浅い箱からは、ぎっしり詰まったビー玉の日差しの反射、キラキラしないのは埃を被っているからだ。

五十年以上もここで駄菓子屋を営むのは、七十二になる西川スミという婆さんだった。近隣からは強欲婆と呼ばれている。年端も行かない子供達に要りもしない高いものを売りつけ、単に遊びに来た子供にも必ず何かを買わせようとするからだ。

しかし、昨今少子化が進み、コンビニが進出するに及んで、今時、レトロな駄菓子屋に子供が寄りつくことはない。並べられた商品も時代遅れの感は否めない。

そこにやって来たのはノーネクタイの真っ赤な開襟シャツ、主任に昇進したばかりの蓮沼健介二十七歳だ。不動産会社の営業で、この辺りにマンションを建てるために、この駄菓子屋を買収しに来た。今まで三度も足を運んだが、スミが首をたてに振ることはなかった。だから敷居をまたぐ足先に勢いもなく、強欲婆の名に恥じないスミの視線におよび腰で、埃の匂いをかき分けるようにおずおずと店の奥に入った。

「健坊、またきたんか。ここは売らんぞ」

「ば、ばあさんも、もうそろそろ足腰が立たなくなるかもだろう。そうしたら、ど、どうすんの？」

「余計なお世話や。この店先で死んでやるわい」

「あのね、今売れば、介護施設に入れるだけの金額にはなるんだよ。一人娘も寄りつかないんじゃない、だれも面倒見てくれないじゃないの」

と、健介が婆さんの好きな虎屋の羊羹を上がり口に無造作に置きながら、これまで何度も繰り返した痛い所をまた突いた。慚然と健介を睨みつける視線を逸らして、

「だいたい、もう客なんかこないでしょ。この古敷谷周辺には、コンビニが四件もあるんだし、学校近くの駄菓子屋も去年廃業したしな。玩具屋もバイパスにできたトイザーマスに週一度、家族と車で行くようになってるし。」

「そんなものん、どうでもいいわい。ここに座って五十年、駄菓子屋のスミ婆に何を寝言いってるか！」

スミが腰を浮かして腕を上げた。この間も頭をポカリと打たれたのを思い出し、健介はのけぞって避けようとした。

この婆さんにはかなわんなあ――と心の中で弱音を呟くと同時に、空を切った拳とともに婆さんが、健介の組んだ胡座に倒れ込んできた。そしてそのまま動かない。

「おい、婆さん、どうした？」

息はあるが意識が無い。ここでぽっくり逝かれたら気色悪いし、寝覚めも悪い。

脳溢血か？――健介は慌てて店の電話で救急車を呼んだ。

担架に乗せられ救急車に運ばれる間に、スミがふっと薄目を開け、

「健坊、店番を頼んだぞ」

それってヲイという顔つきをした健介に向かい、がりがりで皺だらけの腕を伸ばして座卓を指さした。

「引き出しの中に価格表があるけ、客が来たら、それ見たら値段がわかるけ」

この後に及んで、まだ売らなかりかあとあつけにとられながら、サイレンの響きを残して遠ざかる救急車を呆然と見送るしかなかった。

健介が一息つこうと腰を下ろしたとたん、婆さんのたった一人の娘、正木澄江に連絡しなければと思いついて受話器を取った。

婆さんが買収に応じないので、親戚縁者の力を借りてでも説得しようと、前に一度会ったことがあるのだが、その時はけんもほろろに断われた。

なにせ嫁いだ後、親を嫌って寄りつかない娘。強欲婆の悪名は近隣に轟いていたから、子供の頃から隣近所で虐められて、無理もないかもしれないが――。

「中央病院に運ばれたはずです」

電話口ではあさんの娘、正木澄江は言葉を失った。

「あの、言いにくいんですが、俺、店番を頼まれちゃって、困っているんですが――」

健介がなんと続けたら良いか分からずもじもじしていると、電話口の向こうから号泣が轟いた。やはり親子だなと健介の胸も少しばかりひくひくしてくる。

「あ、早く病院に行った方が、いいですよ」

はたと泣き声が止んだ。

「やっぱり母は母なんです。だから蓮沼さん、店番、お願い！」

――ガチャ！

「あ、あい――」

ツーツーと鳴る受話器を顔の前に持ってきて、ヲイと叱りつける健介。

これも営業、ピフォーサービスの範囲なのだと自分を慰めながら、さっきスミが座っていた擦れた藍色の座布団にどかっと座り込んだ――痛て！ 座布団が薄すぎるだろう、このっ！

紛れもない座布団だが、年月に押しつぶされたように薄い。

――もしかして、この座布団に座って五十年か？

床に直に座るよりは僅かにましかも知れないが、綿が押しつぶされて、畳んだらそこから折れそうなくらい固まっている。健介は思わず座布団をひっくり返し、裏側を確かめた。根が生えてなくてよかった――と自分の冗談にぞっとした。

若い頃のスミは、古敷谷小町と言われるほどの美人であったとか。

因縁があるのか、健介の親父が物心を覚えて初めて美しいと思った人はスミだった。それを知るのは父と健介だけだ。引く手あまたの縁談を断り、（当時の駄菓子屋は小金持ちでないと出来なかった）駄菓子屋の一人息子と恋に落ち、嫁いだ。澄江が生まれたとたん、亭主の父母が相次いで早世し、その亭主も交通事故で帰らぬ人となった。残されたのは若く美しいスミと、乳飲み

子の澄江であったという。寄る辺も無き母子二人のその後の人生……。

親父から聞いたその話を健介は思い出し、スミの無数の皺を一つ一つ、脳裏の中で伸ばしてみたり広げてみたりしてみたのだが、美しい面影は浮かばず首を傾げるばかり。

親父によれば、スミの目つきが鋭くなり、積極果敢な商法が無垢な子供達に浴びせられるのに、そう時間は掛からなかったらしい。

座卓の引き出しを開けて、大学ノートを引き張り出しているこの健介もまた、その被害者の一人なのだ。本人もうっすら思い出している。

――おばさん、百円のザク下さい。

ひと月の小遣い、五百円玉を握りしめた健介はまだ六歳かそこらであった。ぴかぴかの一年生という言葉がまだぴかぴかしていたころ。

――ザク、ザクって五月蠅いわね。ないものはないの！ それより、こっちのガンダムが、もっとつおいのっ。

棚の上の方に積まれていた五百円のガンダムを素早く押しつけられ、スミの勢いに飲まれたその虚を見事に突かれた。左手の親指と人差し指で挟んでいた五百円玉がむしり取られた。

――ありがとうね。

――あ、あの、おばさん、百……ザ……。

耳が聞こえなくなったかのように知らんぷりされて、でも、大きな箱の五百円のガンダムは本当にかっこよくて強そうで……、本当はガンダムが欲しかったから無理もない。

家に帰って見ると、母親がこれがまた輪を掛けた鬼になって、こっぴどくしかれて、それから一月、何も買えずに友達がアイスを買って食べているのを指をくわえて見ていた惨めさと不運。

物思いに耽りながら、引き出しから取り出したノートをめくる内に、健介がぎくっとして固まった。百円のザクの仕入れ値七十円、五百円のガンダムの仕入れは三百円という事実には愕然とした。

頭を傾げて虚空を睨み、

――一日十箇ザクを売っても、三百円ぽっちの儲けか、ヲイ！ それじゃバイトの日給にも及ばないじゃんか。

子育ての苦労など知らない健介でも、乳飲み子を抱えたスミが、ガンダムを必死で売りたかった気持ちくらいは想像できるのだ。

そしてその苦労をコケにして家に寄りつかぬ一人娘。座布団の薄さが痛々しい。埃を被った時代遅れの商品が哀しい。

子育てのために恐ろしい鬼と化したスミの顔。しかしその鬼が横を向くと、若くて優しい美人が束の間にも顔を出した。複雑な思いに翻弄されて、健介はいつまでも呆けて虚空を睨んでいた。

西日が積み上げられた段ボールの隙間から差し込んで、光りの筋の中にゆっくり漂う細かい埃がはっきり見えた。

――このまま帰ってこないこともあるし、そうでなくても、どうせお迎えは近いしな。

さっぱり客のやってこない駄菓子屋で、こんな話、持ってこなきゃ良かった——と健介が俯いた。この件はしばらく保留にしようと決心する。もし生きて戻ったら、婆さんにもっと心ゆくまで駄菓子屋をやらしてやりたくなった。

——きっと、婆さんにとって、これしかないんだろうな……。

蝉の鳴き声が窓ガラスを震わせる。それ以外の物音もない。時間が止まったような空間で、健介が薄い座布団に座り続けている。

娘が嫁いでも三十年以上経っているのだ。

——婆さんの時間は、娘が嫁いだその時に止まっちゃったんだ。

薄暗い駄菓子屋の奥で、この座卓の前にちょこんと座り続ける皺だらけの老婆。これまでの蓄えが潰えれば、客はこないなのだから、食うものにも事欠くのは目に見えている。ミイラのように干からびて、座卓の前に座ったまま事切れたスミを想像して、

——即身成仏じゃあるまいし。

そう思うと、怖気にぶるんと震えた。

だが、それからまもなく、健介の暗い心配をよそに、スミはうら若い娘に付き添われて、タクシーで帰ってきた。

「店番ありがとう。たいへんだったあ？」

ショートカットの前髪をかき分けるその娘の仕草と、快活なその声に健介は思い出した。

彼女はたしか、孫の英里子。

——こんな美人だったか！。

「い、いや、売上ゼロだから、それほどでも」

この間、娘の澄江に会いに行ったとき、ちらっと挨拶だけしたのを鮮明に思い出した。

「英里子、健坊にお茶をあげておくれ」

「うん、いいよ」

そう言うと、お茶を入れに、英里子がなんだかうきうきして座敷の奥に入ってゆく。

スミは何事もなかったように、健介が持ってきた虎屋の羊羹を開けて、美味そうに頬張っている。

「ちょっとした貧血でな。強欲婆はそう簡単には死なんわ」

奥からばあさんの台詞を聞いたのか、英里子がからからと笑っている。

ところがスミが健介をじっと睨んでいた。健介は腰を引いて身構えた。

「とりあえず、無事でよかったじゃん、ばあさん。で、あの話、なかった……」

「健坊、この店、売ってもいいぞ」

健介がつまんだ羊羹を取りこぼした。

「ただし条件があるがな。ここに建つマンションの一階店舗に入れてくれるなら売ってもいい。どうだ？ 澄江とこの孫の英里子がな、怪我の功名、そこでモダンな駄菓子屋を作って、引き継いでくれることになっとな」

強欲婆の皺が嬉しそうに深くなった。

英里子がお茶を差し出しながら健介に頷く。



「そうなの。だって駄菓子屋って、今時見直されてきているしさ。可愛いじゃん」

「ば、ばあさん、よかったじゃんか……」

「ああ、澄江も英里子もこのバアの死に目を想像して、目が覚めたらしいわい」

「おばあちゃん、そんな意地悪な言い方しないでよ。ママはいつかは仲直りして、おばあちゃんの面倒をみるつもりだったんだから。でも、倒れて病院に運ばれたって聞いたとき、ほんと、びっくりして、二人してわあわあ泣いたけどさあ」

健介が風に飛ばされた風船を、また捕まえた時みたいな顔を向けた。

「カードゲームも置いたらいいんじゃないねえ。あれ、結構ガキの間で流行っているらしいし」

そう良いながら健介は、ばあさんの顔から皺を取り去ったサンプルを、英里子の顔に見いだしていた。健介の親父が惚れたのも無理はなかった。

――ポカッ！

「健ぼう、英里子をいやらしい目で、見るんでねえ！」

ばあさんに殴られながらも健介は、マンションの中の超モダンな駄菓子屋に、心をときめかせていたのだった。（了）

## 社員食堂にて思いついた話

---

さすが一流農機具メーカーの社員食堂は、メニューも豊富でお得感満載だ。ざるうどん定食を選ぶまでに、二倍の時間が掛かった。四十五にもなり、まだ家のローンが続いている以上、昼飯は客先の社員食堂と決めている。そういうポジティブな楽しみがなければ、地方都市に出張してまで、OA事務機器の飛び込み営業など、誰が出来るか？！

そこにゆくと、俺のように、社員食堂に通うという全く次元の違う楽しみを持つ営業には根気が備わる。楽しみがあるから、度々顔を出し、担当に笑顔でじっくり印象を植え付けられる。つまり今まで新規開発した顧客は皆、社員食堂が充実していたというわけだ。

にんまりしながらうどんを啜る。つるっと口の中で飛び跳ねて、歯ごたえが嬉しい。大盛りを頼んで良かったと思いつつ、もう一つの楽しみを味わう。俺の会社とは違って、ここは大所帯だ。若い女子社員達、目の保養、気分が晴々するこの一時は貴重だ。ローン返済と子供の教育のために鬼のように儉約を強いる妻とは、とても同じ種族とは思えない。

耳の良い俺は、女子社員が小声で囁く話もある程度は聞き取れる。そこから営業情報をいただいたこともある。それを確実にするために、いくらなんでも盗聴器はまずいだろうから、代わりに補聴器を買おうかと思ったこともある。このしょぼくれた人生に大きな不満があるわけでもないのにやめて置いたが。

窓の外には実験農場が広がる。新型の耕耘機が畑をすいすい耕している。右目の隅に、サンマ定食を食いながら携帯で話している女が映った。色白だから茶髪は似合う。しかし、この食堂で、ヲイ。毛糸の帽子を被ったまま飯を食うか。二十歳前だろうか。アイラインがどぎついし、頬骨が少しばかり張り出して、何か土臭い口元も締まりがない。OLとは異質な何か？ 何なんだ？

俺にも同じくらいの娘がいる。しかし何処か似ている。急にうどんが味気なくなったのも何故か？

「だからさー、親父なんて最低なのっ！ 親父臭いし、酒臭いし、煙草臭いし、臭いの三連発なのっ。偉そうに説教ばっかしたれるくせに、家にいると、ごろごろしてただけでさ、邪魔だったんだよ、まったくもう」

娘の愛花から、同じような事を言われた時を思いだした。親の苦労も知らない馬鹿娘め――と睨みつけていた。と、同時に自分の娘の愛花も、世間に出て友人と話すときは、親をけちよんけちよんにけなしているのではないか、そう思うと、胸がドキドキした。帽子娘がちらちらと俺を覗いている。目の縁がきらっと光ったのは何で？ と思ったとたん、俺の携帯が震えた。女房からだった。

「あなたっ！ 愛花をなんとかしてちょうだい！ さっき、アパート、借りたからって、出て行っちゃたんですよ、もう！」

「し、仕事ちゅうだぞ」

「だ、だってえ」

「ま、まあ、落ち着け。それで俺に何をしろと？」

「決まっているでしょ。連れ戻してください」

「お、おい。娘の愛花も十九だぞ。まずは、よく話し合ってだな――」

「そんなノンキでいいんですか？ 愛花には男がいるんですよ、ヲ・ト・コ。きっとアパート借りて同棲するつもりなのよ」

「な、なに！ 同棲？」

思わず、大声が出てしまった。周りの顔がそろって俺に向いた。あの帽子娘も、じっと俺を睨んでいる。

携帯を掌で包んで小声で言った。

「娘に男が出来たからってうろたえるな。話せば分かる。仕事が終わったら、愛花の携帯に電話してみるから、必ず連れて帰る……」

と、言って携帯を切ったが、語尾が力なく消えたのは、自信がないからだ。その時、帽子娘の目の前に、百姓姿の親父が立った。実験農場が隣接している会社だから不自然ではないが――。

「千尋ちゃん、昼飯済んだ？」

帽子娘がすくっと立ち上がり、丁寧なお辞儀をする。今までのだらっとした表情がきりっと引き締まっている。

「先生、お疲れ様です。お先にいただいています」

その初老の男が娘の目の前に座った。

「あ、あの、お茶入れてきます」

きびきびと立ち上がり、お茶を入れに行く帽子娘の変身ぶりにあいた口がふさがらない。

俺は、はっきりいって、少しばかり感心した。あれだけ親をけなしていた娘が、百姓姿の男に対してあんなに礼儀正しいなんて。そう思うと同時に、我が娘も、同じようであってほしいと、脈絡のない期待が膨らんだ。それはもう、切なる願いだ。この世で生きて行くためには、少なくとも礼節くらいは最低必要なのだから。

すると自然に顔がほころんで、お茶を運ぶ帽子娘ににかっと微笑んでしまっていた。

あの親父、おかしい。睨みつけたり、愛想笑いを寄越したり。首から提げた名札で来訪者だというのは分かるけど。突然「同棲？」なんて叫んじゃって、うどんが鼻から飛び出しそうにうろたえたり。たぶん娘のことで動転したらしいけど。うだつの上がないサラリーマンを絵に描いたような顔つきに、悲哀を感じちゃう。だってどこかオヤジに似ているし。

そんなことより、高梨先生、なんで実験農場の作業着そのまま社員食堂に来るんだよ、もう。私がわざわざ着替えてランチを食べに来ているのが場違いになっちゃうじゃん。ランチの時から、ちょっとはおしゃれさせて、気分転換させてほしいよ、まったく。

「高階先生、お茶をお持ちしました。せんせ、どうして着替え、なさらないのですか？」

「あ、うん、面倒くさくてさ」

「手は、ちゃんと洗いましたか？」

「お、おう。おててはちゃんと洗った。しかし、なんだねえ、千尋ちゃんも、あれだね」

「あれって？」 「うちに就職して、実験農場に回されたのは、不運だったね」

確かに。不幸中の不運だった。農家が嫌で事務員として就職したのに、入社が決まったとたん、実験農場で畑仕事するはめになった。実際、チェツと言いたくなる。

「いえ、ちっとも不運じゃないですよ。私、農業、野菜、作るの好きですから――」

うどん食い終わった親父が聞き耳を立てているような気がする。心なしか、涙ぐんでいるような。そんな表情もおやじそっくりなんだよ。

「そういつてくれると、俺も嬉しいよ。なかなかがんばってくれる社員がいなくてさ」

「でもね、せんせ、ランチの時だけは着替えていただけないでしょうか」

「え？ どうして」

「だってね、少なくとも野菜の匂いより、肥料や土の匂いのほうが強いんですよ。だから他の人達に――」

「お、おお、おおお、そこまで気配りができるの、千尋ちゃんは！」

高階先生とうどん親父の二人が同時に目を見開いた。

「マナーですよ。マナー。実験農場課はR & Dの花形でしょう。会社を支えているのですから、品位もプライドも、これから作っていきましょうよ」

「むむむ、千尋ちゃんの言うとおりでな。俺、これから着替えてくるよ」

「はい、お願いします」

初老にさしかかった高梨先生は、おじいちゃんみたいで、扱いやすい。ちょっと浪花節的な話を作れば、ほいほいと言うことを聞いてくれる。

とにかく、私にとってはメリハリが大事な。農作業は嫌いだけど、慣れた仕事だからそれなりにしっかりやる。机にしがみついたのパソコンルーティーンワークは、やったことがないし、たぶん苦手だし。でも、OLになった気分は味わいたいし。朝夕は私服で通勤し、仕事の時は野良着（＝作業着だし）に着替え、そしてランチはOLと同じ服装でって、それが私の理想。

「千尋ちゃん、お待たせ。確かに着替えると、フランスのパリのようにおしゃれになって、パリッとするね」

うどん親父が思わず吹き出しそう。わかるよ、それ。

「千尋ちゃんはどうして農業が好きなの？」

嫌いなんですと言おうとして、それじゃ話のつじつまが合わなくなる。うーんと唸って、その間に頭を働かせた。

「たぶん、子供の頃から、農家で育ったからだと思います」と、答えた。

「そうか、農家は家族総出で働くからね。農家出身の人は家族思いの人が多いきくけど」

十四・五になったとき、農業が凄く恥ずかしくて、父母とも口をきかず、手伝いもせず友達らと街で遊び呆けた頃があった。家は「ダサイ」の語源になった埼玉の農家だし。

東京の隣県でありながら、田畑が広がる埼玉では、ネギを満載した籠を背負って、電車に乗る人もいる。するとどうなるか？ わざわざ着替えてランチするこの気持ち、分かって欲しい。本当ならシャワーを浴びたい所だけど、そこまでの余裕はないから、土埃を被った髪の毛を帽子で隠しているこの身だしなみ。そこまで分かってくれる人がいたら、結婚しても良い。

「そうなんです。農家はみんな助け合って、作物に愛情を注ぐんです」

その時、再び母から携帯がなった。

「千尋、とにかくお願い。家出したお父さんを捜さないで。会社の帰りに警察によって頂戴よ。もういなくなって一ヶ月よ」

父の居所を知らないのは母だけだ。父はスナックのママといい仲になって、隣街に住んでいる。私は大声を再びあげていた。

「だから、何度も言っているでしょ。あんな親父なんか要らないの。臭いし、ダサイし、スケベだし！」

潤んだ目に映ったのは、うどん男と先生の二人が、同時にあっけにとられた顔だった。（了）

孫の寛太に陸蒸気を見ようとせがまれて、草いきれ漂う線路脇に立った。晩夏の夕刻、あたりの雑草をなぎる風音と一緒に陸蒸気の遠い汽笛を探り聴く。寛太が待ちきれないように音の方へ手を引いて、陸蒸気を待つわくわくするような気持ちが伝わってくる。だが、私には、何か哀しい響きに聞こえるのだ。レールがなければ走れない陸蒸気と、杖がなければ歩けない盲目の私。

汽笛の音を追いかけて地面が微かに震え、急速に地鳴りのような轟きが近づいてきた。周囲を威圧しながら鋼鉄の重みは全てを飲み込む勢いで、疲れを知らない体力を漲らせている。鉄の轍を車輪は回り、数百を超える人間を乗せた貨車を動かす轟音、削り擦れ合あう鋼鉄の軋みは切なく、人声の音域ををはるかに超えて耳奥を突く。七十年も生きてみると、油の切れた歯車のぎくしゃくを節々に感じる我が身に比べて、しわの寄らない黒金の肌で、走りに専念できるのが少し羨ましいか。若い頃の自分の乱暴な猛りも思い出させる。

早い調子の蒸気音が響いてきた。くべられた石炭が赤く燃えて、灼熱の釜土で水は姿を変えて気に還ろうと、その生まれたてが狭いところに閉じ込められて、はち切れんばかり、開放されれば蒸気は外の世界に溶け入る前にピストンを、車軸を回し、汽笛を吹き鳴らす。何かをしたくなるような躍動感を覚えた。

寛太の手が強く握りしめられて、怖いような勢いが目前、再び耳を揺さぶる汽笛は怒って、寛太と私の体を同時にびくつかせると、突如殴るような風圧が襲い、毛髪を吹き飛ばして浴衣を奪うようにはためかせた。湿り気を帯びた生暖かい突風が吹きぬけて、思わずうっと息を止める。まるで喘ぎの息吹、巨大な怪物に舐められたらしい。

風が弱まり、長く続く貨車のレールを刻む調子が、間が抜けてほっとさせるように続く。迫り来ていた勢いが、通り過ぎた時を境に音を変えて柔らかく、初恋の人にふられた後のような虚脱感、陸蒸気の長い後ろ髪に惹かれるように、私の手からもいつの間にか力が抜けていた。

哀愁に耽る間もなく、微かな刺激のある匂いが鼻先をかすめて、煤煙が風に運ばれて頬に触れてゆく。寛太がみじろで、

「うわー、じっちゃん、陸蒸気、臭いぞ」

むせる煙から逃れようと何歩か下がり、再び田舎の匂いを見つけて一息つく。

「おや、目明きのおまえには見えないのかい？ 仕事をする者は皆匂うものさ」

と、寛太に蘊蓄をたれてみれば、返事の代わりにがんばれよと陸蒸気に声を掛ける孫の体の揺れ、手を振っているのだ。

遠ざかる勢いは、安堵させるような響きを残し、地鳴りが静まるにつれて私の心も穏やかになる。遠くなった汽笛が物悲しく小さく、風音に溶けてあたりを撫でてゆく。汽笛を真似するカラスが一羽、陸蒸気を追いかけると、孫は家路へシュシュポッポと手を引いた。（了）

## それはないだろう

これを盗んでくださいと言わんばかりのウエストポーチは、赤いパスポートと小銭入れが入っていると宣言しているようなものだ。この娘、日本人に違いない。

しかし、まとまった金は他の場所にある。

そう、何リットルもの容量がありそうな紺色のバックパックの中だ。旅先でいったい何を持ち歩くというのか、この中国の奥地でノートパソコンでも持ち歩いていたら笑える。それに念の入ったスポーツサンダルを履いている。強盗に襲われたら走って逃げるつもりなのだろうが、賊はそんなに甘くない。この娘、どこかずれていないか？ まあいい、だからこそカモなのだ。

しかしこの仕掛けはいつもながら素晴らしい。張りぼての雄鳥から両足を突き出し、白鳥で無くて残念だが、ちょうど股間の辺りから首を前に伸ばして、赤い鶏冠と黄色い嘴でひと目を惹くのだ。鶏の目玉がぎょろり、どこも見ていない虚ろな目だが、全てのカモを見通しているかのようで、笑いをかみ殺すに苦労する。サスペンダーで支えながら、鶏の背中のかぼみにはご当地、雲南お土産ナンバーワン、厄除けの護符を彫った鶏骨を並べて売っている。

道行く人が必ず一瞥を寄せる。そしてこの娘、案の定、立ち止まってお土産にしげしげ見とれている。鶏の体をひと揺らし、厄除けの呪いをぶつぶつ唱えたと、細い目をさらに細めた。どこかで見たような女だが――。

過去は捨てたのだ。あれは十五年も前、通い婚が今も行われているという少数民族、モソ族を訪ねて、雲南と四川の省境、神秘のルーグー湖畔へ向かった。閉塞感漂う日本を見限った旅だった。

そのモソ族に受け入れられれば、男は仕事もせず、美しい娘の家を毎夜訪ねて、種を蒔くだけだという話だった。男一匹、そのような世界があるなら、どうしてそうせずにおれようか。貯金をかき集め全てを捨て、赤いパスポートを振りかざして奥地に向かった。

目の大きな、華奢な顔立ちの若い女に受け入れられた。長い髪を大きく丸く編んで頭に乗せ、大ぶりの赤い花をいくつもさして飾る。着物によく似た赤と白の民族服に、どこか懐かさを覚えた。

たおやかな湖畔で、昼間はキセルで煙草をふかし、将棋に興じ、夜が来るとあの女の家にはひっそりと忍び込むのだ。そして明け方までは、至福。

家族はみな優しくかった。その優しさに答えようと、毎夜、贈り物を持ち込んだ。家電製品が増えていった。化粧品も、宝石も――。

バックパックの底に隠し持っていた現金は、ゆるやかに、そして慎ましく消えていった。

ところが贈り物が途絶えた途端、女の家が閉ざされた。

この邑では、女の家で眠れないということは、甲斐性がないということで、野宿するしかなかった。そして分かるのが遅すぎた。

言葉も通じず、食べ物にも事欠いて、同じようにあぶれた用無し男どもに誘われて、昆明の町に食い詰め者として流れてきた。

それからは、この土産売りで食いつないできた。生活に困らない程度の言葉も覚えたとし、路地

裏のねぐらもある。パスポートなどとっくに破り捨てた。敷居のない便所で大便をするのも何とも思わなくなった。

現地化、故地喪失者、IDを持たない者。この歳になると、余計な欲もなく、虚飾もない。過去もなく未来もない。その日一日、厄除けの呪文を唱えて、この張りぼての鶏を担いでいるのだ。それもまたフーテンのトラ。

はて、この日本の娘は土産を買うのかどうか。娘の後ろに立つ仲間がすでに彼女のバックパックをカッターで切り裂き、手を入れようとしている。それから気を逸らすためのこの派手な物売りだ。

「おじさん、これいくら？」

日本語で聞かれたら、流ちょうな日本語で答える。それでさらに気を逸らせる。

「お嬢さんは美人だから、まけとくよ」

娘の目が見開かれた。細い目から零れそうなほど。まだ値段を言っていないのに、なぜそんなに驚いた顔をするのか。俺の日本語に、そこまで驚くか。まるで失踪した父親に、偶然出会ったように驚いて――。

見開かれた目から大粒の涙？

それはないだろう。そんなことは有ってはいけない。いくらなんでも――。

頭に乘せた網帽子をまぶかにかぶり直し、

「今日は特別だよ。これはただであげよう。あ、あんたのバック、穴が開いているよ」

目配せすると、仲間が素早く手を引っ込め、何気ない顔で往来を見遣る。

「だめじゃないか。ここらあたりは、スリがうようよ。後ろにも目を付けないとね」

抱きつきそうな娘から、すうっと離れ、鶏の頭を回してゆっくり路地に向かおうとすると、

「おやじ、それはないだろう！」

怒った娘の声が背中を叩き、首をすくめるしかなかった。



## ホミニドの歌と踊り

読んで頂いて、ありがとうございます。  
こちらのホミニドの歌と踊りは、追々掌篇集にするつもりです。傾向はどちらかという、  
ほのぼの系でしょうか。  
これからもよろしくお願ひします。

もう一つ、掌篇集を作っています。

「ミラー・ニューロン」

<http://booklog.jp/item/3/53522>

こちらの方はもうちょっと  
趣味に走ったテーマが多いです。  
こちらもよろしくお願ひします。

なお、小説家志望の仲間を集めております。

著者 : hatasanshiro (畑三四郎)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hatasanshiro/profile>

著者メルアド : hata.sanshiro@gmail.com

ブログ カキコミュ (作家志望仲間のブログです。できたてほやほや^^)

: <http://monokakicom.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53939>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53939>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブ ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ